



全日畜だより

第 52 号

2022 年 7 月 28 日

<https://www.alpa.or.jp/>

農畜連携事業（JRA 事業）のワークショップを 鹿児島県で開催しました！！



◎ 開催日：令和4年7月5日 13:00～16:00

◎ 会 場：鹿児島県サンロイヤルホテル

◎ 地元鹿児島県をはじめとした九州各県を中心に、各地から、畜産・農業経営者約20名、飼料メーカー約30名、行政関係者、工業会、県基金協会等団体関係者約30名ほか、報道関係者、事務局合せて約100名の参加者が集まりました。

第 1 部は農畜連携の事例紹介を行いました。

最初に行政担当者から鹿児島県の畜産生産の概要、飼料作物等を通じた耕畜連携の取組状況、家畜排せつ物の有効循環の取組などの発表があり、続いて宮崎県都城市の養豚経営者から飼料用米への取組や、飼料用米を与えてブランド化した豚肉の特徴や、自ら飼料用米生産に取り組むとともに飼料用米生産者との取引で中間コストを大幅に圧縮できていることが発表されました。さらに、薩摩川内市の肉用牛生産者から、稲 WCS を利用していること、自家生産を行うとともに、稲 WCS 生産者の収穫作業受託も行い、自場生産の堆肥の散布も実施するなど、稲生産者の化学肥料購入費の抑制、地域の資源循環にも貢献していることなどの発表がありました。

最後に、鹿児島市の肉用牛生産者と、その生産者に WCS を納入している熊本県の大規模稲 WCS 生産者からの発表がありました。概要は、肉用牛生産者は、自社で TMR センターを持ち、九州の耕作地、休耕地を活用して集めた稲 WCS など、TMR 発酵飼料を生産し、自社飼養の乳用牛や育成期の肉用牛に給与するとともに、九州の自社グループ農場の牛に供給し、一方でそれら耕作地への堆肥の還元などを行っていること。大規模稲 WCS 生産者は、約230haで稲 WCS を生産して畜産生産者に供給し、畜産生産者から堆肥の供給を受けて自ほ場に散布するといったことで、県を跨いだ資源循環を行っていることなどの発表がありました。

第2部は意見交換を行い、出席の生産者等から多くの質問や意見が出され、発表者等から回答や感想が述べられました。



(その後の意見交換の様様)

地元報道機関の関心も高く、南日本テレビ、南日本新聞の取材もあり、当日のTVニュースや翌日の紙面で報道されました。

令和4年度第1回農畜連携事業推進委員会を開催



(推進委員会委員の皆さん 機械振興会館 会議室)

◎ 開催日時: 令和4年6月15日(水)(13:30~15:30)

◎ 議事概要

令和3年度の活動実績及び令和4年度の事業実施計画を事務局が説明し、出席委員からは、年末開催予定のシンポジウム開催方法に、集会方式・WEB方式ならばより多くの人の参加も可能であり検討してはどうか、指針については、畜産、耕種それぞれの立場での意見があり、さらに、飼料メーカー、行政機関関係者、関係団体などいろいろな意見を聞いてシステムティックにまとめてほしいといった意見が出されました。

(文中での団体の略称標記について)

- 全日畜：一般社団法人 全日本畜産経営者協会 ●全日基：一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金
- 工業会：協同組合 日本飼料工業会 ●〇〇県基金協会：一般社団法人 都道府県配合飼料価格安定基金協会